

<今日の説教のポイント 創世記1章26～28節>

私たちの生きる意味は、私たちを造り、生かして下さる方から来る。

1 八方ふさがりはまだ全て閉ざされていない。上方が開いている。

いじめにあつて自殺する子どもたちや、他者との交わりを遮断して引きこもっている人たちの苦悩はどれだけ大きいかと思えます。「自分が生きて行ける場所はない」と思うようになった時に、人が引きこもったり死を選んでも不思議ではないでしょう。しかし、私が残念に思うのは、八方ふさがりは万事休すではなくて、まだ上方が開いているのに、と思うことです。上方とは、まさに神に向かう方向です。

2 聖書に耳を傾けるのは、絶望が希望に変わる幸いの時。

聖書は神が私たちにご自身を示すために与えて下さった書であり、私たちが自分勝手に読んで批判したり批評したりする書ではありません。むしろ、私たちがこの書に真剣に耳を傾けなければならない書です。それは自分に自信のある時は訪れず、私たちが自分ではどうすることもできない絶望状態になった時にこそ訪れるものです。だとすると、八方ふさがりの時は絶望の時ではなく、実は、真の神に聞き従って生きる新しい人生に入る戸口に立っている幸いの時であるとも言えるのです。

3 世界と私たちを造られた神と出会う書、聖書の創世記。

その聖書の最初は創世記です。読むと、荒唐無稽の物語に思えるかもしれません。しかし、創世記は科学書ではなく信仰書です。その物語を通して神が何を語ろうとしておられるのかを聞き取ろうとすることが大事です。その答えははっきりしています。神が世界を造られた、私たち人間も神に造られたということです(1:26-27)。そして当然、造り主が私たちに託した役割、私たち人間が生きる意味も記されています(28)。自分で考えるのではなく、造り主なる神が考えられた意味です。

4 この神様を知る時、私たちの生きる意味も明確になって行く。

聖書を読んで行く中で神様のことが分かってきます。御子イエスによって、「疲れた者、重荷を負う者は、だれでも私のもとに来なさい。休ませてあげよう」(マタイ 11:28)と呼びかけて下さった神様のことが分かって来るのです。たとえどんなに孤独の中に置かれようとも、「あなたはもう一人ではない、私があなたと共にいる」と呼びかけて下さる神様をです。「主はすぐ近くにおられます」(フィリピ 4:5)。 次週に続く。